

自分が信じる方を知る

ある年老いた男が寒いローマの牢獄で座っていました。彼は親しい友への手紙を書き取ってもらったところで、間もなく自分の信仰の故に処刑されることを知っていました。

正気を失った皇帝ネロは、ローマ市街に火を放った後、それをクリスチャンのせいにし、自分に向けられた市民からの批判の目を逸らすため、多くのクリスチャンを捕まえ、殺していました。

先ほどの手紙を書き取らせた年老いた男は、後に打ち首にされました。しかし、この男は自分が間もなく処刑されると知っていたにも関わらず、一切恐れがなかったのです。それどころか、死刑直前に彼はその手紙に勝利と希望の言葉を書いたのです。

私が世を去る時はすでに来ました。私は勇敢に戦い、走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通しました。今からは、義の栄冠が私のために用意されているだけです。かの日には、正しい審判者である主が、それを私に授けてくださるのです。

この男性は誰で、なぜ死後にそのような信仰と希望を持てたのでしょうか？これらの質問の答えを見つけるために、彼が書いた手紙を読んでみることにしましょう。それは新約聖書のテモテへの手紙第二から始まります。

最初の質問の答えはシンプルです。

新約聖書のほとんどの書簡を自分で書いたり、書き取らせたりした使徒パウロがこの偉大な信仰と希望をもった男です。

二番目の質問への答えはこの手紙の第1章から見つけることができます。

11 節と 12 節で自分の弟子であり仲間の宣教師であるテモテへ書いた彼の信仰と希望の源を探してみましょう。

第二テモテ 1:11 私は、この福音のために、宣教者、使徒、また教師として任命されたのです。1:12 そのために、私はこのような苦しみにも会っています。しかし、私はそれを恥とは思っていません。というのは、私は、自分の信じて来た方をよく知っており、また、その方は私のお任せしたものを、かの日のために守ってくださることができると確信しているからです。

この聖書箇所にはたくさんの方が書かれています。今朝は「イエス・キリストを知ること」が私たちの日々の生活にどのような意味をもたらすかということに焦点を当てていきたいと思えます。

1 イエス・キリストを知ること

A. 永遠の命と救いの源

この教会では、「キリストを知ること」という言葉や似たような表現をよく使います。それに関係した言葉もいくつもあります。

例えば、赦される、新しく生まれ変わる、救われる、クリスチャンや神様の子になる等です。

これらの表現は、私たちがイエス・キリストを救い主として受け入れた時に使われる表現です。そしてこれらのことは信仰によりイエスキリストを個人的に知るようになる時に起こることなのです。

しかし、豊臣秀吉やユリウス・カエサルのような単なる歴史上の人物として「知る」ということではないのです。歴史本を手に取り読むことで、これらの人物について知ることはできますが、使徒パウロが第2テモテで語っている「知る」ということは、そういうことではないのです。

パウロがイエス・キリストを知っていると語っているのは、私が克之さんや恵子さんを知っているというのと同じような意味合いです。この人たちは私と個人的な付き合い（関係）のある人たちです。

イエス様は、永遠の命とは、唯一の神を知ることだと語られました。それは、私たちの罪のために十字架で死ぬために人間となって来られた神であるイエス・キリストと関係をもつことなのです。

よくメッセージでもそのことを語るのですが、キリスト教は他の宗教とは違うのです。神々にたどり着くために誰かが考えたような儀式や規則の制度ではなく、私たちが創造し、十字架で死ぬほどに深く愛される神様との関係が根源なのです。

B. この世で一番大切なこと

もしパウロがどのような人だったかということを考えるなら、彼がテモテへ書いたことは驚くべきものです。聖書はパウロがクリスチャンになる前は、熱心なユダヤ教徒でクリスチャンを迫害していたのです。高度な教育を受け、その当時の有名で尊敬された教師の下で学びました。ユダヤ教の指導者の間では、彼の輝かしい将来が約束されていたのです。

しかし、クリスチャンを捕らえエルサレムに連れ帰るため、ダマスコへ向かう途中、予期せぬ出来事が彼に起こりました。イエスがパウロの前に現れ語りかけられました。そして

この思いがけない出会いにより、彼の人生は永遠に変わったのです。彼は自分がイエスのことを完全に誤解していたことをすぐに気付きました。イエス様は死んだのではなく、死からよみがえったのです。旧約聖書の救い主に関する預言が、長年待ち望まれていた世の救い主が確かにイエスであることを明確にしたのです。

イエス・キリストを知ったことにより、パウロは残りの人生をローマ帝国中旅しながら人々に福音を伝えることに費やしました。彼の社会的地位、経済的な安定、身体的な安心、そしてかつての友人たちを失いました。

しかし、パウロは決してイエスを否定しませんでした。第2テモテ1:12で、パウロは福音を延べ伝えたことにより牢獄に入れられたことを恥とは思っていないと書いています。

パウロは同じ「恥」という言葉を何年も前にローマの教会への手紙で使っています。ローマ1:16で彼は、「私は福音を恥とは思いません。福音は、… 信じるすべての人にとって、救いを得させる神の力です。」と書いています。

福音一別の言葉では、私たちの創り主が私たちを愛しているという良い知らせであり、私たちと同じ姿でこの世に来られ、関係を築けるようにしてくださったという良い知らせ—その福音とは、イエス・キリストを信じる者すべてに救いを与える神の力です。パウロがピリピ人への手紙で書いた以下のことにはこういった理由があったのです。

ピリピ3:7私にとって有利であったこれらのことを、キリストのゆえに損失と見なすようになったのです。3:8そればかりか、私の主キリスト・イエスを知ることのあまりのすばらしさに、今では他の一切を損失とみています。（新共同訳）

パウロのような人からこのような発言がされることは驚くべきことです。彼がすべての言葉を本気で語っているということは、パウロが信仰のゆえに耐えたことを知る人には明らかかなことです。

8節では、キリストを知ること、パウロのすべての過去の実績より良いといったばかりではなく、「主キリスト・イエスを知ることのあまりのすばらしさ（口語訳：絶大な価値のゆえに）」というような表現をしています。

イエス・キリストをよく知ること一別の言い方では、神の子となる、私たちの罪に対する赦しされること、永遠の命を得ること—これらすべてのことは、今日多くの人々が手に入れようと必死になっているこの世の地位や、名誉、富、繁栄と比べると「絶大な価値」があり素晴らしいことなのです。

多くの人々が、失業したり、愛する人の病気や死を経験したりするなど、自分の人生の土台が揺れ動かされるような出来事が起こるまで、このことを理解できずにいます。しかしパウロはイエス・キリストを知ることが人生で一番大切なことだと知っていたのです。

C. 私たちの確信の土台

1. イエス・キリストを親密に知ること

パウロは日々の生活をイエスに対する信仰の土台の上に置き、イエス・キリストをもっと親密に知るようになりました。イエス・キリストは架空の人物でも遠く離れた存在や無関心な救い主でもありませんでした。イエスはパウロの主人、創り主、友でもあったのです。

パウロはイエスとの個人的な関係から自身の考えをもっていたため、死が迫った時にも確信があったのです。イエスは30年間以上パウロを見守り続け、そしてパウロは自分の死が差し迫った時でさえ、イエスが自分を見捨てないということを知っていました。彼は死と直面していましたが、パウロはいずれ全ての人は死ぬということを知っていました。クリスチャンであるということの問題のない人生が送れるということではないということも知っていました。またイエスを知る者は、その問題に一人きりで立ち向かう必要がないということも知っていました。パウロはイエスが誠実な友であることを知っていたのです。そればかりではなく—イエスは全能の神様です。

その牢獄の独房にいるときでさえ、何があったとしても、イエスがともにおられるということに疑うことはありませんでした。肉体的に死んだとしても自分の存在が消えることはないということに疑うこともありませんでした。それが新しい命の始まりであり、パウロがこれまで経験してきたことや想像をはるかに超えて素晴らしいことだと知っていたのです。パウロは自分が死んだときには、イエスが天国で迎えてくださるということに疑いませんでした。

それはパウロが善い人だったからということではなく、自分の救い主を知っていたからです。自分の魂の救いをイエスにゆだねるということに確信をもつことができたのです。パウロは福音の土台を知っていて、人が「善い行い」によって救われることはないを知っていました。

神の驚くべき愛と恵みによって、イエス・キリストへの信仰によって罪から救われるのです。もし私たちの赦しと救いが自分たちの努力によるのであれば、だれも救われることはないでしょう。しかし、監獄で死を待つパウロにとっては、イエスを知っていて、イエスが誠実な方であるということを知っているから平安だったのです。パウロの心はイエスの憐みや素晴らしさ、誠実さと恵みへの賛美に溢れていました。

イエス・キリストを親密に知っていたから、パウロは自分を待ち受けることに対して全く恐れていなかったのです。彼にとって死とは、単に大切な主との永遠の世界へ入るための扉だったのです。

2. ペテロは本当の意味でイエスを知らなかったからイエスを知らないと言った

イエスが捕らえられた夜、ペテロは間違いを犯しました。ペテロはイエスと3年過ごしましたが、実はイエスを真に知らなかったのです。ペテロがイエスを知らないと言ったことや、イエスを否定するくらいならイエスのために死ぬと言ったことは有名な話です。しかし、その夜、ある召使の女にペテロがイエスと一緒にいた弟子だと指摘された時、彼は何と言ったか覚えていますか？ペテロは「そんな人は知らない！」と自分が助かるために明らかな嘘をつきました。

しかし、ここでペテロが知らないといったことを考えてみると、彼の深い意識では彼が言った言葉は本当のことだったということが明らかです。もし、彼が本当の意味でイエスを知っていたなら、イエスを知らないとは言わなかったでしょう。イエスについて知っているということは、イエスを知っているとは違うのです。

II. どのようにイエスを知るか

では、どのようにイエスを知ることができるのでしょうか？

A. イエスと関係を築く

罪を悔い改め、救い主や主としてイエスに信仰を置くことが、イエスと関係を築くための始まりです。聖書に書かれているとおり、創造主の私たちに対する愛、神が私たちの天の父になりたいと願われていること、そして素晴らしい関係を持つことができるようにしてくださいましたことというのが、私たちが知っておくべきことです。イエスに対する信頼を置く前にイエスについて知っておく真実は聖書だけに書かれています。

II テモテ3：15 聖書はあなたに知恵を与えてキリスト・イエスに対する信仰による救いを受けさせることができます。

確信を持ってイエスを求めることができるのは、I テモテ2:4にこの約束があるからです。I テモテ2:4 神は、すべての人が救われて、真理を知るようになるのを望んでおられます。

もしあなたの創造主と救い主を知りたいと心を尽くして求めるなら、必ず見つけ出すことができます。神はエレミヤ書29章で次の約束を私たちに与えておられ、I テモテ2:4と結びついて私たちの心が願うのであれば、神を知ることが明確です。

もし、あなたがたが心を尽くしてわたしを捜し求めるなら、わたしを見つけるだろう。

B. イエスとの関係を育む

イエスとの関係はただの始まりに過ぎません。パウロが経験したのと同様の確信を持つことを望むのであれば、その関係を育む必要があります。日々、神の御言葉を読むことや、祈りをとおしてイエスと会話して過ごすことに時間を取るのです。そしてこのように、イエスを知り、愛する他の人々とともに定期的に集うのです。

C. イエスを主とする

もし、本当に私たちが心の奥底から主を知りたいと願うのなら、主は私たちの主であるに違いありません。もしくは、私たちは少なくともそうであってほしいと願わなければなりません。ピリピ人への手紙3:8でパウロが書いていることを覚えていますか？

ピリピ3：8 私の主キリスト・イエスを知ることのあまりのすばらしさに、今では他の一切を損失とみています。（新共同訳）

私たちが神の御心を知りたいと願うとき、私たちはイエスをさらに知ることになります。イエスが私たちの内で、私たちを通して生きることを許可するときのことについて、パウロはガラテヤ書 2:20 で語っています。

ガラテヤ 2:20 もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。今私が肉において生きているのちは、私を愛し、私のためにご自分を与えてくださった、神の御子に対する信仰によるのです。

パウロはイエス・キリストを自分の主としました。信仰によって、パウロはイエスが日々自分のうちに生き、自分を通して生きられることを委ねたのです。イエスに関して知っていることがあったから、許可できたのです。パウロはイエスが無条件で自分を愛し、その愛により、イエスが自らの命を十字架で捧げたことを知っていたのです。自分に対するイエスの愛に確信を持っていたからこそ自分の人生すべてと魂の救いをイエスにゆだねることができたのです。パウロがそうしたことによって、パウロにとって、イエスは更に現実の親密な方になったのです。

D. イエスをさらに知りたいと願うこと

最後にもう一つ。私たちがイエスを親密に知りたいと強く願う時、イエスを更に親密に知ることができます。私たちの多くは、ここでもがいていると思います。

私には苦手なことがあります。 私は、根っからの行動派なのです。

もし私にやらなければならないことや、挑戦しなければならないことがあれば、私は自然に状況を分析し、すぐに取り組み始めます。私にとっては、ゆっくりと時間をとって神を礼拝し、御顔を求めるよりも、主のために何か「行動する」ことのほうがよっぽど楽だからです。同じような方はいますか？

コラ人の子たちがこのように書いています。

詩篇 42:1-2 鹿が谷川の流れを慕いあえぐように、神よ。私のたましいはあなたを慕いあえます。私のたましいは、神を、生ける神を求めて渴いています。

ダビデもこのように書いています。

詩篇 63:1 神よ。あなたは私の神。私はあなたを切に求めます。水のない、砂漠の衰え果てた地で、私のたましいは、あなたに渴き、私の身も、あなたを慕って気を失うばかりです。

私のイエスとの関係をコラ人の子たちやダビデの神に対する姿勢とを比べるとき、イエスは私にとって、まだ究極の願いにはなっていないと認めなければいけません。でも、私はそうなってほしいし、皆さんのうちのほとんどの方もそうだと思います。ホセアが書いた言葉はここにいるイエスを知っている人全員にぴったりです。

ホセア 6:3 私たちは、知ろう。主を知ることを切に追い求めよう。

結論

これが、神が私たちに望んでおられるクリスチャン生活を生きるための鍵だということに疑うことはありません。私たちの教会のすべての人が神様の望んでおられるようになるための鍵。そして、イエスの似姿へと変えられるための鍵。

イエス知ること—これが永遠のいのちなのです！

皆さん、イエス・キリストを知っていますか？まずは救い主、主として知っていますか？そして、決してあなたを離れず、見捨てず、裏切ることのない誠実な友として。主は私たち一人ひとりに主を知ってほしいのです。パウロのようにイエスを親密に知ることが私たちの心の情熱になりますように。パウロが日々を勇敢に戦い抜き、走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通したことで、イエスを知ることになったのです。そして牢獄の監房の中で座りながらこういう事ができたのです。

「私は死を恐れていません。私は自分の信じる方を知っており、誠実な方です。私が死ぬときには、天国に招いてくださり、その方の助けを受けながら、この世で信仰によって生きた人生に報いてくださるのです」

パウロと同じ確信を私たちも持つことができます—もし私たちが願い、パウロのように主を求めようとするのなら。そして、自分の人生でどんなことがあっても揺るがない確信を持つことができ、自分たちが信じる方を知っていることで、それらの困難にも立ち向かうことができるのです。

話を終える前に、1~2分時間を取り、心を静めて、今朝学んだことについて考えてみましょう。祈りに入る前に、主への心からの祈りとして「Lord, I Want to Know You More (主よ、あなたをもっと知りたい)」を歌いたいと思います。

祈りましょう。

天の父よ、十字架で私たちの罪のために死んだイエスを遣わして下さったことで、私たちに愛と恵みを示して下さりありがとうございます。イエス様、大多数の人があなたの愛と犠牲を拒絶すると知っていたにも関わらず私たちのために死んで下さってありがとうございます。主よ、私たちはあなたを知りたいです。本当にあなたを知りたいのです。あなたの助けなしでは、あなたを知ることはできません。主よ、あなたを私たちの心と人生が情熱をもってあなたを求めることができるよう、恵みを与えてください。

どうか、望みの神が、信仰から来るあらゆる喜びと平安とを、あなたがたに満たし、聖霊の力によって、あなたがたを、望みにあふれさせて下さるように。